

未評価出土文化財をめぐる 博物館資料学の実践研究(1)

— 縄文文化解体期の東南四国域における無文系粗製深鉢群の再検証(後篇) —

幸 泉 満 夫

はじめに

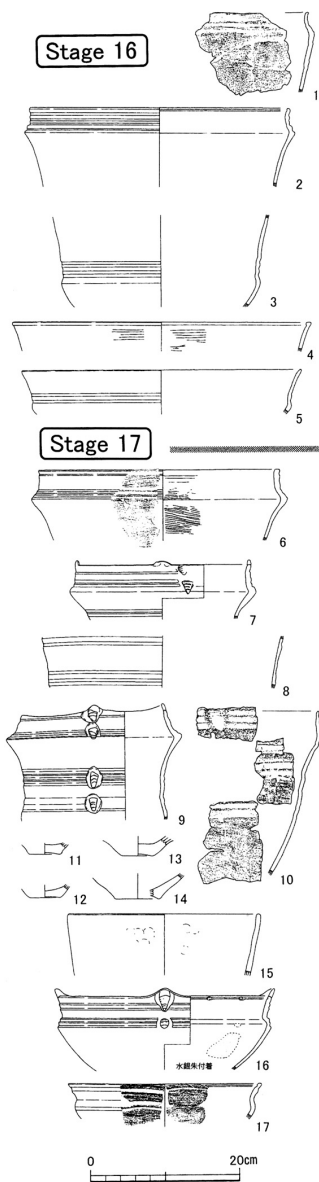
本稿は、本誌第45号より連載を開始した、博物館資料学の実践研究(1) 東南四国篇の後篇である。縄文時代後期後葉より論述を再開する。

5. 東南四国域の検証(後篇) — Stage15～27—

(1) 後期後葉；Stage15～17の様相

縄文時代後期後葉の Stage15段階、西日本では広く凹線文ホライズンが成立する(家根1981・小林1985ほか)。東南四国域もまたその例外ではないが、従来、Stage15～17の凹線文期を示唆する遺跡は、東みよし町の大柿遺跡大坪地区(栗林編2001)¹⁰⁾や徳島市庄遺跡(岡山編1999)等、極めて断片的で出土資料数も僅かであった。結果、該期の様相を議論する機会もまた、久しく失われてきたのである。そうしたなか、阿南市深瀬遺跡(原編2016)における2014年度までの緊急調査で、ようやく Stage16～17前後の比較的纏まった資料群が検出された。そして2016年3月の報告書発刊により、器種組成を含めた本格的な検証が可能となったのである。東南四国域の後篇では、この深瀬遺跡出土資料から考察をはじめたい。

第12図上段は、深瀬遺跡の凹線文土器群のうち、相対的に古相を示唆する SK4015等出土の一群である。屈曲口縁と頸胴部境界域に各々横位単純の凹線文帯を巡らす有文精製深鉢を主体とする。型式学的にみて新しい傾向である口縁端部の外反化が既に顕著であるが、頸部施文はまだ認められない。凹線は太く、内部を丁寧に仕上げている。凹線間の細刻は認められない。2は凹線文系深鉢で、口縁端部内縁に施される痕跡的な沈線文一条は、内沈線文系との折衷を示唆する。けれども、瀬戸内側とは異なり、第12図17のような外反素口縁で端部内縁に刻目帯を有する個体は稀である(内沈



第12図 徳島県南域における
Stage16～17の様相
(阿南市深瀬遺跡：1・6～17
第3包含層、2～5 SK4015出土)

線文系統)。同じく、素口縁で内面端部に横走凹線を施す深鉢も原則存在しない。浅鉢は、逆く字形を基本とするが、深鉢同様、口縁部の外反が顕著化している。以上から、第12図上段は Stage16 の宮滝1式古段階に併行しよう（豊島2010ほか）。このことは、当該遺跡で凹線文ホライズン成立当初の資料群が欠落していることを、同時に意味している。

伴出の無文系深鉢は極めて少ない。出土個体数が僅少であることから、組成率の算定は不能とせざるを得ない。しかし、層位学的にみて SK4015 よりも下部にあたる第4包含層の内容から、無文系深鉢の組成率は1割前後を大きく上回ることはないであろう。つまり、前篇の Stage14 で指摘した無文系粗製土器の急増傾向からは一転、徳島県南部的那賀川（阿南）平野周辺域では凹線文初期の Stage15～16 段階で再び、有文精製器種が器種構成の圧倒的な主勢に返り咲くのである。このことは Stage15 に端を発する凹線文系統が、当該地域では明らかに“外来”であったことを暗示する。その到来により、後期中葉の西方を起源とした無文粗製主体の文様系統組成は払拭され、有文（凹線文系）約9割という、かつてないほどの有文至上主義を示現させたのである。以上は、かつて小林達雄（以下、敬称略）等が唱えた“縄文復興運動”（小林1985）の具現そのものであり、Stage12～14 段階における急速な無文化進行に対する一種のリバウンド現象と捉えられるだろう（家根1981、小林1985、宮地2008・2013、小南2009ほか）。

第12図下段はつづく Stage17、いわゆる宮滝2式併行期の土器群である。深瀬遺跡で主体を成す時期であり、特に第3包含層以下で良好な資料群が検出されている。有文精製深鉢は横走凹線の幅

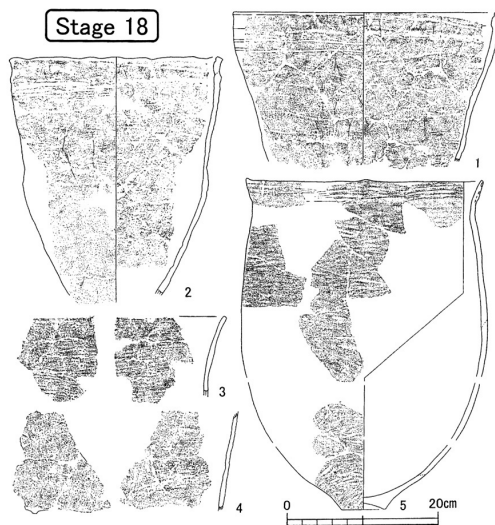
広化と精緻化、ならびに第12図7～10にみられる通り、頸部施文が旺盛な段階といえる。頸部に追加されるはずの屈曲の未発達を除けば、宮滝式の主要分布圏たる近畿地方南部の諸例と比較して、型式学的諸属性に遜色はない。伴出の文様系統としては、やはり内沈線を施す素口縁深鉢が欠落している。つまり、瀬戸内沿岸域で盛行する内沈線文系が窺えないのである。

Stage17における無文系深鉢の組成比は、約1割である(第23図)。器形は、I-1-⑫～⑭形や単純屈曲のI-1-③・④・⑦形(幸泉2017p60)等が伴うとみられるが、小片ばかりのため、確定が難しい。このほか第12図15に示す通り、先のStage14段階で一時的に主勢を成した砲弾Ⅱ-③形深鉢(幸泉2017p60)の存続も、僅かながら確認できている。器面は、一部に指頭圧痕を残す比較的丁寧なナデ調整で仕上げられている。底部については径4～7cmほどの小型、ないしは準小型の凹底ばかりである。

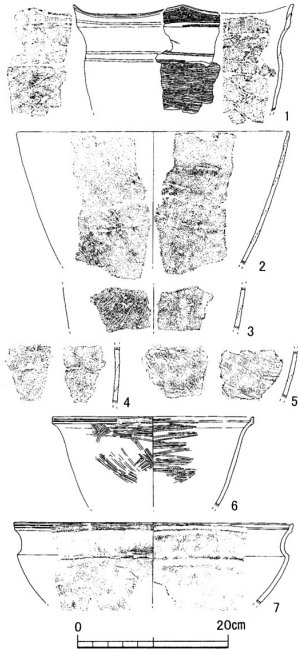
(2) 後期末葉；Stage18～19古相の様相

つづいて後期末～晩期初頭の様相である。該期もまた、これまで極めて発見事例に乏しかった。かつては、東みよし町稲持遺跡のDE区第5包含層等における混在資料(湯浅編1991)から、断片的な様相を類推する程度であった。しかしその後、岡山真知子により徳島市庄遺跡第4次調査区F区における一括事例の公表が成され(岡山編1999)、近年、さらに徳島市観音寺遺跡の後期末資料群がようやく公に報告されたことで(田川編2010)、吉野川下流域(Ⅵc圏)を中心とする本格的な地域編年構築の足掛かりが得られるようになった。

第13図は、前篇で扱った矢野遺跡の北縁に隣接する、徳島市観音寺遺跡の出土資料群である。Stage18に相当する。深鉢では、再び粗製化が顕著に表れはじめる。これは、該期の汎西日本的趨勢であるが、学史的に



第13図 吉野川下流域における Stage18の様相
(徳島市観音寺遺跡；1～4 第9区 SK1015、5 第4区 SK2019出土)



第14図 吉野川下流域の
Stage19古相の様相
(徳島市庄遺跡；SK3208出土)

みれば、古く、滋賀里Ⅰ～Ⅱ式のメルクマールとされてきた指標に合致した内容といえよう。1・2はその典型である。前段まででピークに達した精緻な屈曲成形の連続は崩壊する。全体にメリハリを失い、弛緩化した器形が該期の特徴である。凹線は、弱々しい横走沈線へと退化している。

第13図3～5はStage18段階で共伴関係を成す無文系深鉢の事例である。3の事例から、頸胴の屈曲が弱く素口縁化したⅠ-2-⑦～10形(幸泉2017p60)を呈する無文系深鉢が伴うとみられる。5は、SK2019出土の稀有な完形復元可能な個体である。口径約32cm、口縁部外面に明瞭な縁带状の段整形を残し、胴部下半が下膨れして、西部瀬戸内の岩田第四類ないしは北陸西部の御経塚式に通じた器形を成す。横位基調の二枚貝条痕後にナデを加え、平行線状に仕上げている。極めて緩やかな突起状を呈する波頂部には形骸化した凹点が、指頭により淡く付されている。頸部以下の外器面は二枚貝条痕後ナデで仕上げられる。底部は、径6cmほどの準小型凹底が継承されている。

第14図は、Stage19古相に属する徳島市庄遺跡第4次調査区SK3208出土の一括事例である。報告書ではSB3201北半(SK3208)出土と記載されるが、出土土器の新旧関係から判断して、別遺構として評価すべきである。SK3208出土の有文深鉢は宮滝由来の屈曲口縁深鉢を継承しつつ、凹線が沈線文へと退化する。波頂部の凹点文は既に消失している。ただし前段の弛緩化した口、胴屈曲間の流れに相反していて、頸部の彎曲が再び強調されるようになる(第14図1)。伴出の浅鉢7が示す通り、こうした変化の背景には、黒色磨研系浅鉢の器形情報が関与するとみられる。西方起源を示唆する器種で、福岡県貫川遺跡(前田1989)や山口県岩田遺跡(潮見1960)、愛媛県萩ノ岡貝塚(宮本編1996)、奈良県橿原遺跡(松田編2011)ほかの諸例から、やはりStage19内に収まるとみるべきであろう。このほか口縁部に段状の内沈線を施す、鉢形を呈した6のようなタイプが1点伴出している。以上の特徴は近畿南部の西坊城Ⅰ式(伊藤・岡田2003ほか)に通底するもので、少数ながら、これらの一括出土事例として刮目に値しよう。

伴出の無文系深鉢としては、砲弾Ⅱ-③形(幸泉2017p60)を呈する2が窺える。

口辺部には縦位のやや粗いユビナデ調整が、胴部には横位の擦過調整痕が確認できる。成形は、内傾接合である。

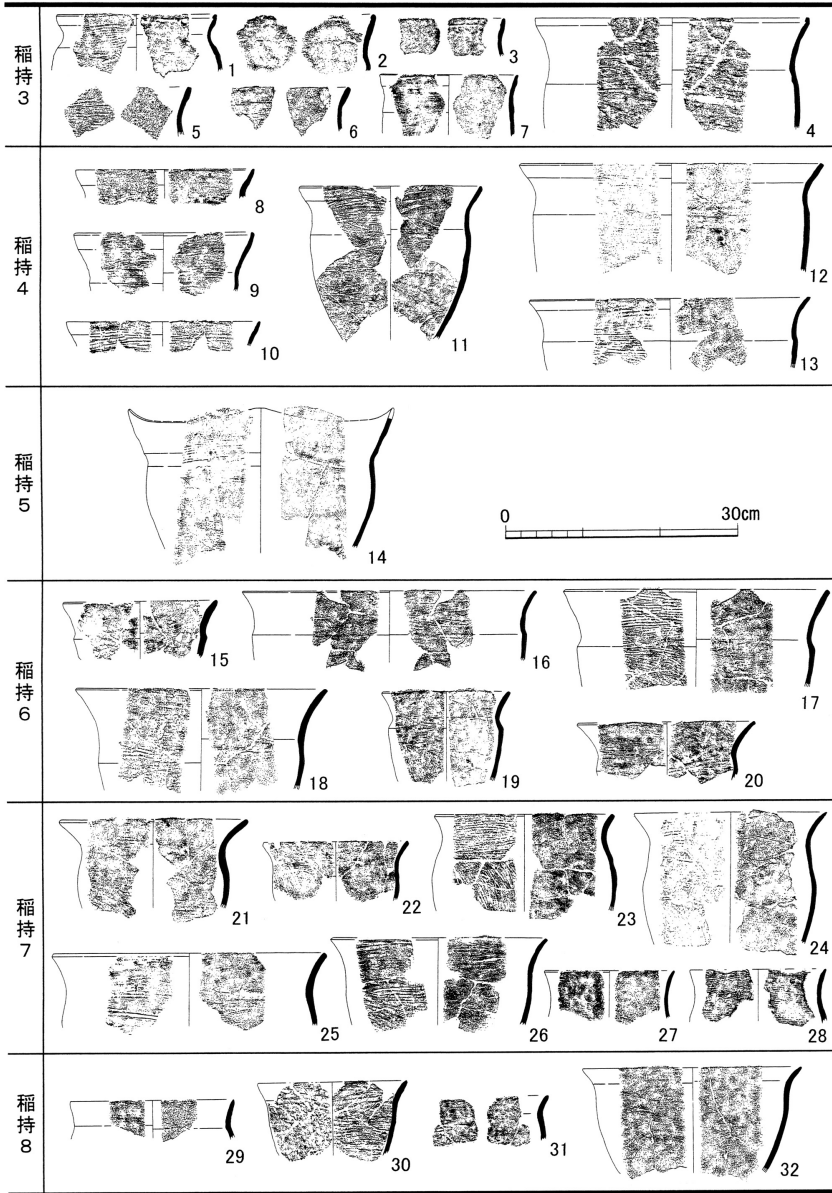
(3) 晩期初頭～晩期中葉；Stage19新相～Stage23の様相

東南四国域においては晩期初頭の資料が極めて少なく、いわゆる大洞B式や御経塚I式併行期の様相を適確に捉えることは、未だ至難といわざるを得ない。現状では、吉野川上流域に位置する東みよし町稲持遺跡の晩期前葉以降の既存資料を中心に、類推を重ねるほかないであろう。

1986～1988年度発掘の稲持遺跡2～3次調査区出土土器は、当該エリアにおける晩期前～中葉を見通すうえで看過できない重要資料群である。しかしながら1991年公開の報告書は既に稀覯本化しており、今日、閲覧すら困難な状況下に陥っている。そこで、将来に向けた資料活用を促す意味でも、この膨大な未評価資料群について、本篇では紙幅の許す限り実測図の再録を心掛けつつ、個々に検討を加えることにした。

最初に掲げる第15図は、稲持遺跡の遺構内出土資料のうち最も遺物が集中するとされる代表事例、堅穴住居状遺構と表現されたSX301出土の資料群である。過去、調査担当の湯浅利彦が1995年に当該稲持資料群をI～IV期に区分した際、その最も古い段階として位置付けた「稲持I期」の指標の一つでもある(湯浅1995p12)。しかしSX301資料は明らかな混在資料を除くならば、第15図に示す通り、概ね6段階に区分可能である(仮称、稲持3～8期)。既知の広域編年網と照らし合わせてみても、一括廃棄レベルでの同時期性を担保させることは叶わないであろう。すなわち、今日的に評価するならば晩期初頭～晩期中葉に至るまで、かなりの時期幅を内包しているということになる。さらに詳しくみると、筆者が後頁でStage20新相と仮称する滋賀里Ⅲa式の新しい時期のみが、ほぼ欠落していることに気付く。公表されている当時の県教育委員会による発掘記録等によると、後述のDE区第5包含層等はSX301の埋没後、つまりは、より上位に堆積していたことになる。しかし、同第5包含層では上記Stage19新相～21新相の一群とは別に、Stage18～19古相の資料を少量含んでおり、さらに矛盾が拡大する。過去、SX301検出面に関する一定の誤認、ないしは検出上の見落としがあった可能性までを加味するならば、SX301については次のような仮説が成り立とう。すなわちStage19新相～Stage20古相(第15図稲持3～4期；西坊城Ⅱ式新相～滋賀里Ⅲa式秋篠段階古相)が堅穴住居の使用期間を、つづいてほぼ空白期を成したStage20新相(第15図稲持5期；秋篠段階新相)段階を経て、晩期中葉初期にあたるStage21古～新相(第15図稲持6～8期；篠原式古段階)の時期に、既に窪地状を成していた堅穴住居跡への連続的な土器廃棄が行われたという解釈である。

以上は、かつて小林達雄が堅穴住居内への土器多量廃棄に対して提唱した「吹上パ



第15図 稲持遺跡竪穴住居状遺構 SX301出土土器群の型式分類

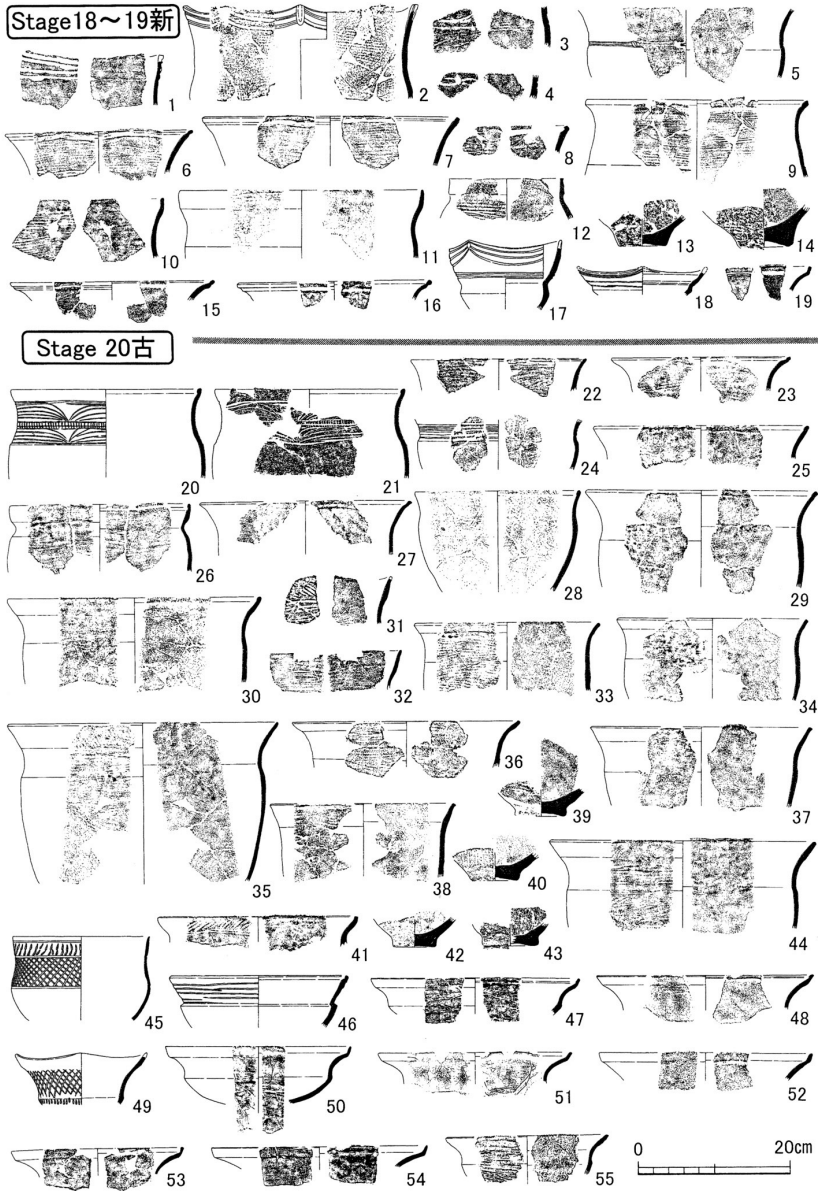
(1～7: Stage19新、8～13: Stage20古、14: Stage20新、15～20: Stage21古、21～28: Stage21中、29～32: Stage21新)

ターン」(小林1965・1974ほか)を彷彿とさせる展開である。のち、末木健は小林の定義する同パターンに住居利用時と土器廃棄に至る間の一定の時間差を強調した。そして当該事例の如く、窪地化した竪穴住居跡への土器の一括投棄の問題を提起したのである(末木1983p71-72)。上記 Stage20新相の空白時期がこれにあたるとすれば、上記 SX301資料における不可解な時期幅もまた、上手く説明できよう。以上により、筆者はこれまで「稲持 I 期」として一括評価されてきた膨大な SX301資料群が大きくは二時期(合計6段階)の、しかも、一定の空白期を介した性格の異なる二つの累積結果であるとみてきた次第である。

以下、本稿では報告書で公表されている他の遺構、層位ならびに出土地点の徹底した比較再検証を頼りに、出土土器群の型式学的再評価を試みることで、併せて上記仮説を補強したい。稲持遺跡第2・3調査区で主体を成す縄文後期末葉～晩期中葉段階の土器群全てを対象に、型式学的視座から、改めて10期に細分する¹¹⁾。

最初に検証するのは、稲持遺跡 DE 区の包含層¹²⁾のなかで、最下部にあたる DE 区第5包含層出土の土器群である。うち第16図上段では後期末～晩期前葉、Stage18～19新相に属する一群を抽出した。有文の凹線文系深鉢では、文様が口縁部のみに集約され、頸胴部界線の失われた個体が少数ある。Stage19新相に帰属する可能性の高い一群であるが、セット関係は明らかではない。口縁端部内面に一条の沈線を施す6～8のようなタイプは、先の SX301では僅かに痕跡化した個体一点のみへと減少していたことから、晩期初頭の Stage18～19古相にまで遡る可能性が高いであろう。何れも口縁端部に弱い面取調整を残す屈曲形外反口縁で、うち6・7は凹線の退化した太沈線を内外面ともに施す。9・10は岩田第四類の系譜上にある末裔タイプである。先の SX301と比較して段状沈線が明瞭であること、さらに口縁部外面の段状稜線が辛うじて遺存していることから、小南裕一の説く岩田第四類の最新段階、IV期のなかでも相対的に古相に措定できよう(小南2000・2007)。このほか第5包含層では、砲弾Ⅱ-③形(幸泉2017p60)が極少量残存している。後述の SX301や SK310等では認められないことから、該期前後への帰属が想定されよう。伴出の浅鉢では、凹線文系の系譜を引く多重弧線文を描いた第16図17・18のほか、Stage19段階と類推される二段屈曲の黒色磨研系浅鉢、第16図15・16・19が確認できる。該期ではまだ、口縁部外縁の狭い縁帯部に一条の沈線をめぐらせるのが常態である。

つづく第16図下段は、上記 DE 区第5包含層で主体を成す Stage20古相の一群を抽出したものである¹³⁾。稲持4期に相当する。先の西坊城Ⅱ式併行期で顕著にみられた口・頸・胴部各々の界域における屈曲稜線は弛緩化が進むが、まだ辛うじて維持されている(第16図30・33～38・44ほか)。口縁は外傾度を深めるとともに、比較的長く延びつつある頸部の外反化とも調和しはじめる。胴部上半は後出の Stage21段階と



第16図 吉野川上流域における Stage18~ Stage20古相の様相

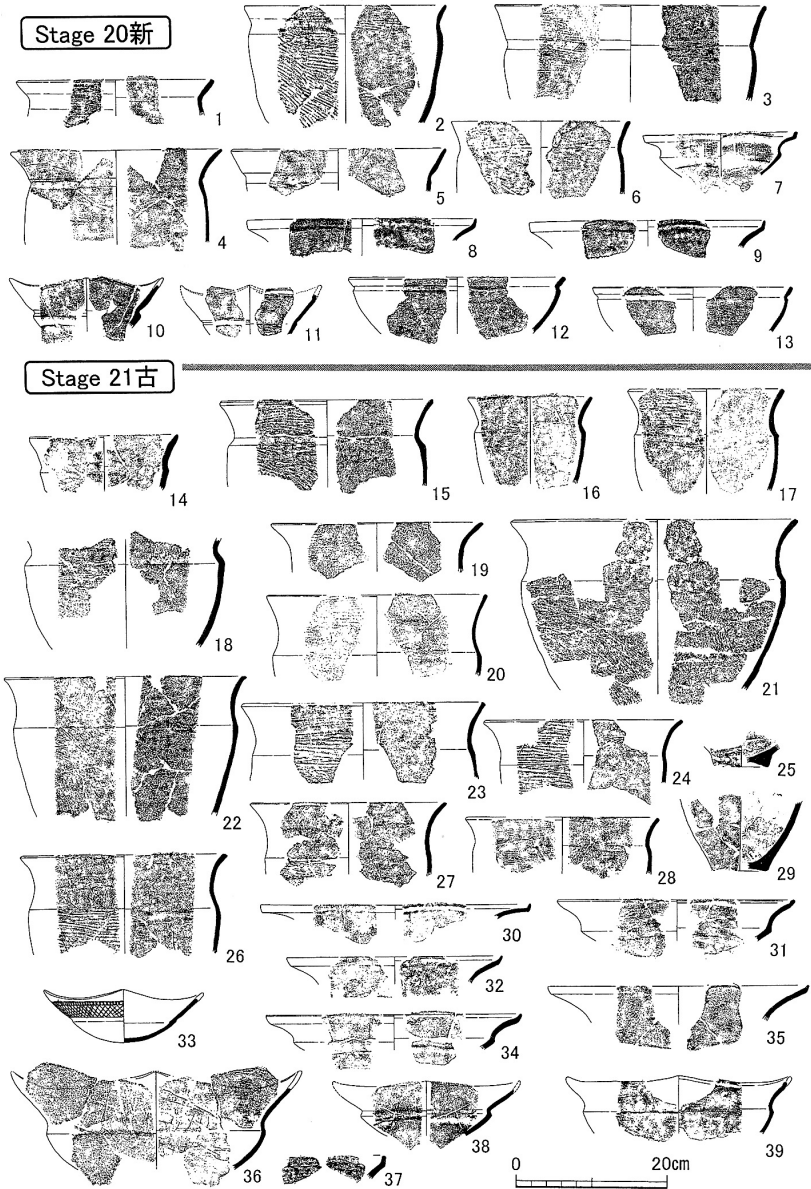
(東みよし町稲持遺跡; 1~31・33~35・37~49・51~54DE区第5包含層、32・36・50・55DE区第4包含層出土)

比較して幾分張りが強く、直立気味に成形される。近畿地方の滋賀里Ⅲ a 式秋篠段階（岡田1998ほか）のうち、特に古相として、分離し得る一群といえよう。加えて、これらとの伴出関係を想定できるのが、岩田第四類の末裔にあたる第16図27・28の一群である。口縁端部内縁の段状沈線は弱く、痕跡的となる。また本来、対を成すはずの外縁の段も著しく衰滅している。さらに20・21のように櫃原式崩れの意匠を頸部に伴う個体や、30のように先の西坊城Ⅱ式崩れのタイプと折衷する個体すら窺える。まさに岩田第四類崩壊期の様相といえよう。成形は内傾接合、器面調整はナデまたは二枚貝条痕を原則としており、関西側で顕著に窺える口縁、胴部のケズリ調整はまだ確認できない。底部は径6cm前後の小型ないし準小型凹底を主体とする。

伴出の浅鉢は、第16図45・49に示されるような櫃原式崩れの多重格子目文、46のような多重沈線文よりも、黒色磨研系の浅鉢が主勢を占めはじめる（47・48・50～55）。器形は、前段と同じく口縁に明瞭な直行、ないしは外傾の屈曲部を設けた二段屈曲を維持するが、Stage20からは沈線文が失われる。第16図50がその典型であり、頸・胴屈曲部の態様からは、共伴する深鉢の器形との共通性が窺われよう。

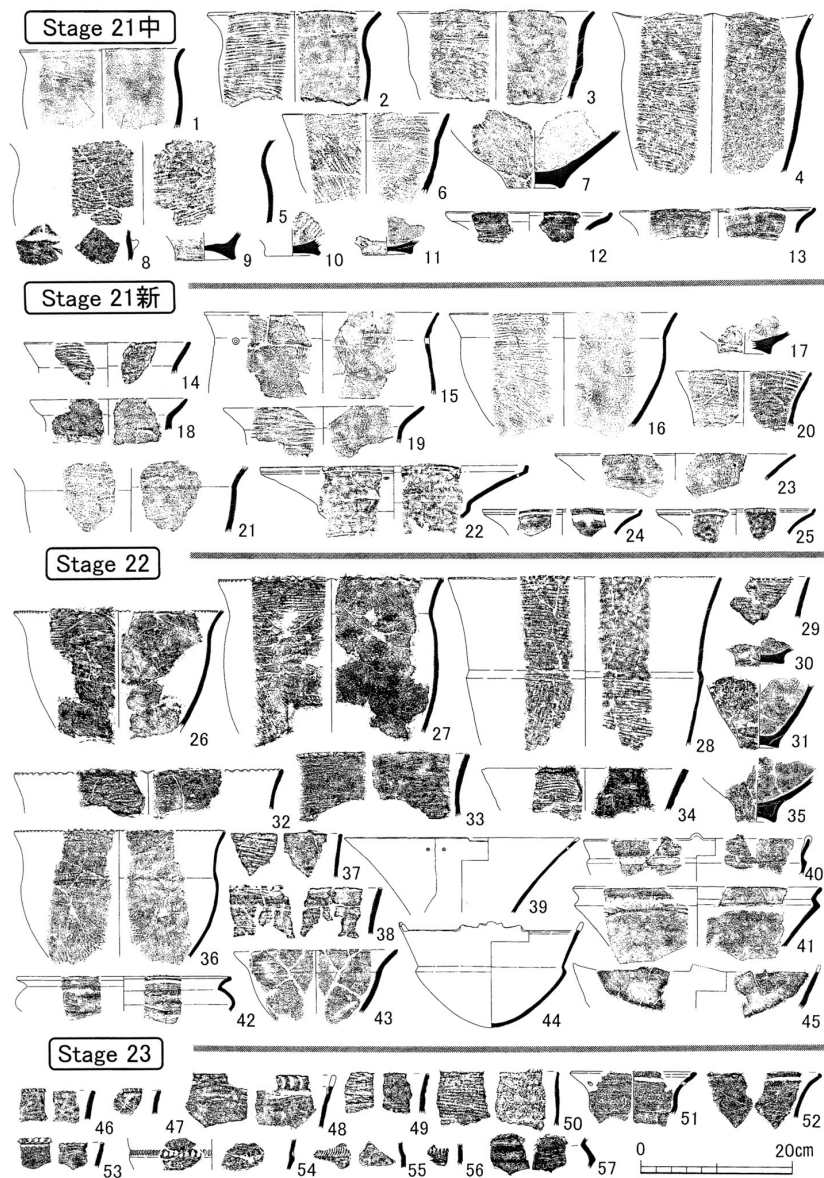
第17図上段は Stage20新相にあたる一群である。稲持編年の5期に拮定する。同じく DE 区第5 包含層で比較的多く出土しているが、個体数的には、先の Stage20古相に比べて幾分減少傾向にある。口頸部間を画していた甘い屈曲はこの段階で完全に失われ、代わりに、頸胴部界域に強い極太凹線状のヨコナデ調整が加えられるようになる（第17図1～6）。左記のヨコナデ調整は視覚的にもある種象徴的な存在であり、広域編年の指標として注目されてきた経緯がある（岡田1998・2003、小南・藤本2006、小南2008・2009ほか）。近畿地方の滋賀里Ⅲ a 式秋篠段階でいえば、その新相段階として区分し得る一群といえよう。うち、第17図1・2のような過渡期的段階の存在を再評価するならば、先の Stage20古相から連続する頸部屈曲の萎縮化が、それら界域調整の契機と判断できよう。伴出の浅鉢では、黒色磨研系一色となる。二段屈曲形は前段と大差ないが、口縁部の立ち上がりが幾分短くなる。また、単純ボウル形で頸胴部界域に深く、明瞭な凹線を施す第17図10～13は、深鉢との絡みから、該期の所産とみるべきであろう。

第17図下段は、筆者が稲持編年で6期とする晩期中葉篠原式（家根1994）の最初期、Stage21古相と仮定する一群である。SK309で纏まって出土している。深鉢は、前段の頸胴部における極太凹線状を成したヨコナデ界線が後退し、胴部最大径位置の鋭い稜線一条のみへと変化を遂げる（第17図14～24・26～28）。ただし先の秋篠段階新相併行との過渡期を示唆する14～18では頸胴部の界域にヨコナデ調整を残し、強く彎曲している。つまり、該期に生ずる胴部稜線は、口頸部の滑らかな外反化推進と相俟って、前段で極太凹線状を成した界線の上縁を払拭させることで誕生したとみるべ



第17図 吉野川上流域における Stage20新相～Stage21古相の様相

(東みよし町稲持遺跡：1～7・11～13・18・22・24・26～28・31・32・34～36・38・39DE区第5包含層、8～10・15DE区第4・5包含層、14・16SK301、17SU301周辺、19～21・23・25・29・33・37SK309、30SK304出土)



第18図 吉野川上流域における Stage21中相～ Stage23の様相

(東みよし町稲持遺跡：1 SK309、2～3・5～10DE区第4包含層、4・11SK311、12・13・18DE区第4・5包含層、14～17・19～25SK310、26～45SR202、46・47・50・54～57SR201第9層、48・49・51～53F10トレンチ出土)

きなのである。故に、必ずしも新しいとみる必要もないだろう¹⁴⁾。この頃には、完全なる外反素口縁化が定着している。浅鉢もまた、前段の技法を継承する。二段屈曲形黒色磨研系は、口縁端部の立ち上がりが萎縮化して、摘み上げ状を成す（第17図30～32・34・35）。さらに、前段で登場した頸胴部界域に太凹線を施すボウル形タイプは、深鉢の器形変化に対応して、屈曲稜線形へと変容するとみるべきだろう（第17図36～39）。

第18図最上段は、稲持編年で7期とした Stage21 中相の一群である。DE 区包含層においては最上位の第4包含層で、比較的多くの類例を認めることができる。先の Stage21 古相で掲げた SK309 資料群では、第18図1に示す1点のみ、当該期にまで下る個体が含まれていた。また出土数が少ないため不確実だが、SK311では該期に属する第18図4・11と、次段階相当の14が伴出している。第18図1～6に示される通り、Stage21 古相の胴部で発生した稜線は早くも鈍化をはじめ、強い S 字状（I-1-⑦・⑧形；幸泉2017p60）を呈するようになる。第18図2・3は、前段 Stage21 古相からの過渡期を示す事例で、胴部最大径位置には弱い稜線が遺存している。口縁部では依然外反口縁を保持するが、前段と比較すれば、その反りが幾分弱まっていることに気付くだろう（第18図2・3→1→4→6）。胴部の張りもまた、次第に弱くなる。器面調整は二枚貝条痕が主流であり、該期ではまだ口辺部のみならず、横位基調のまま胴部にまで明瞭に施される個体が多い（第18図2～6）。底部は径5～7cmの小型、ないしは準小型凹底を原則とする。浅鉢は少ないが、二段屈曲形では、口縁端部の摘み上げ成形が鈍化し、西方諸圏と同等の玉縁肥厚形へと近づいてくる（第18図12・13）。

第18図中上段は稲持資料群で第8段階とした、包含層出土の最新段階資料群である。Stage21 新相、今回、筆者が篠原式古段階の新相時期として分離させた一群である。ここでは、SK310が該期の一括例として挙げられよう。深鉢は口縁部が短く直線的に外傾成形されるようになり、さらに頸部で鋭く屈曲することで、「く」字形を呈するようになる。また胴部の張りも一層弱くなる（I-2-③形；幸泉2017p60）。こうした器形変化については、近畿方面からの影響が想定される。ただし口唇部の刻目はまだ出現しない。また第18図15・16・19に示される通り、該期では一部に器壁の薄手化が顕著な一群（器厚4～5mm程度）が新たに登場する。二次成形段階におけるケズリ調整の採用が想起されるが、最終器面調整は全面ナデのほか、依然、胴部に至るまで横位の二枚貝条痕を原則としており、ケズリ調整のまま放置する個体は、該期ではまだ確認できない。底部は凹底を継承するが、SK310では底径7cm前後を主体としており、些か大型化の兆しが窺われる。伴出の浅鉢については、二段屈曲形では口頸部を長く伸延させる傾向が一層促進する（第18図22ほか）。その口縁端部は、23のように素口縁とする個体も散見できる。注目されるのは、既に一端消失したはずの口縁

部外縁における横走沈線がここ、SK310に存する点である（第18図22～25）。もっとも、先の Stage20古段階と比較するならば、明らかに細線化している。当該地域では既に忘却された意匠であることを鑑みれば、22～25は混在と断定してしまうよりも、現状では外来系の可能性を残しておくべきであろう。このように Stage21、篠原式古段階の成立期はまだ晩期前葉の要素が部分的に残存する等、漸移的な推移が垣間見れる。それは、かつて家根祥多が強調した深鉢の無文様化と、粗製（粗雑）化達成（家根1981ほか）に向けた転機ともなる時期だけに、本稿における該期細分の試みは一定の評価が期待できよう。もっとも同古段階の細別は、他地域では未だ充分な検証が進んでいないため、周辺地域との併行関係は今後委ねられた課題ともいえる。ゆえに、広域地域間における影響関係の詳細復元については、別稿に譲るものとしたい。

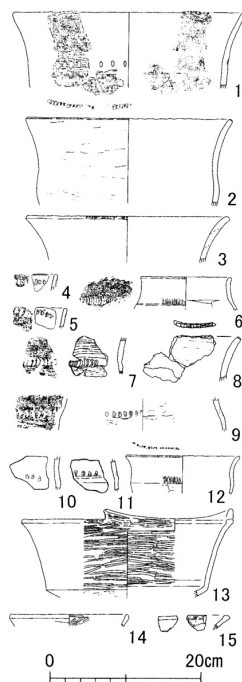
つづく第18図中下段の Stage22段階でも、同じく深鉢の「く」字状口縁が主体的に継承される。該期で刮目されるのは、突如として、口唇上に広義の刻目が付されはじめる点である。筆者が稲持9期とした Stage22段階を特徴付ける地域編年の一つのメルクマールである。稲持遺跡では、調査区南縁に位置する SR202でのみ纏まって出土している。上記までで扱ってきた DE 区以北の調査地点では、一切出土していない点も注目されよう。また第18図28のように口辺部が長く、やや外反気味に成形され、頸胴部間に短く鋭い屈曲を加える深鉢も、新生の器種である。伴出浅鉢の44等からも推察される通り、浅鉢の器形を転化させた新タイプとみてよいだろう。器面調整についてはこの時期、胴部にケズリ調整を加える例が出現、普遍化しつつある（第18図26～28・36）。結果、器体を薄手化する深鉢が一般化する。底部は小型凹底～準小型凹底で、底径は、再び小型化の傾向をみせはじめる（底径5～7cm程度）。ただ、そうしたなかで、第18図35のように基底部を極厚に仕上げる例は極めて例外的である。類例を探れば、それらは愛媛県松山市船ヶ谷遺跡（栗田編2000）や福岡県北九州市春日台遺跡（上村編1984）、同貫・井手ヶ本遺跡（前田編1990）など、明らかに西方へと偏る。稲持遺跡における出現率が極めて低い点も、西部瀬戸内以西からの外来影響を認めるならば、肯けよう。この第18図35の存在は、晩期中葉開始期における深鉢の急速な無文粗製の源流を思料するうえで、興味深い資料といえる。浅鉢は、口縁端部の摘み上げ技法が廃れ、内縁への玉縁肥厚化が進行する（第18図42・44）。加えて単純素口縁を特徴とする39～41・43・45のようなタイプも派生している。口頸部が長く伸延するタイプの39は、前段を継承しつつ一層の拡張化が窺えた。このほか、単純「く」形を呈する40・41や、深鉢形に通ずる43・44、あるいは型式学的にみて胴張形浅鉢の中相を成す42など、一気に、黒色磨研系浅鉢のバリエーションが増してくるのである。

第18図最下段は Stage23、稲持10期とした篠原式新段階、谷尻式併行期の資料群で

晩期中葉の Stage21~23、いわゆる篠原式併行期に関しては、遺構ごとで深鉢細部の特徴が異なる傾向を指摘できた。そして本稿では、それらの連続的対比の結果、新たに稲持6~10期を提起した次第である。なかでも西日本各地で類例の少ない Stage21、篠原式古段階を3期に細分できた点は、一定の成果であろう。従来、報告書の稀覯化とも相俟って、徳島市庄遺跡の1次A区SR3001と2次D区SR3002（前川編1996）の断片的資料を例に大まかな区分案に留まってきたのが当該資料群である。今回改めて型式的操作を進めたことで、かつて末木等が指摘した空白時期と移住性をめぐる問題や、土器変遷の内外要因を、東南四国域においても段階的、かつ連続的に捉え直すことが可能となってきた。このことは、該期の無文系粗製深鉢群の動態を広く把握し直すうえでも、基礎的かつ重要な作業と位置付けられるであろう。

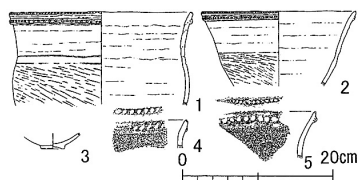
以上本稿で再設定した合計10期のうち、最終段階とした Stage23段階については、稲持遺跡では資料数が少なく、遺憾ながら様相把握は困難であった。従来、該期では他に阿波市の上喜来蛭子~中佐古遺跡 SK1039（辻編1994）が知られる程度であったが、近年、徳島県南部に位置する阿南市宮ノ本遺跡（島田編2008）、小松島市新居見遺跡（岡本編2015）において、断片的ながらも幸い、該期の新資料が相次いで発見されている。以下補足しておきたい（第20図）。

深鉢は、先の稲持資料群でも認められた胴部屈曲の弱い傾向が同じく継承されている（第20図1・2）。瀬戸内側と比較して、口縁の外反もまた相対的に弱いといえよう。口唇部への直刻と、頸胴部間の横位刺突列、ないしは押引刻目文が盛行している。先の稲持遺跡と同様、口縁端部内面側に刺突のおよぶ事例はなく、頸部の縦位刻目列も窺えない。これらは、備讃瀬戸側からの谷尻式の影響を示唆しているが、頸部の縦位素文を欠き、屈曲の弱い頸胴部界域に弱々しい横位押引刺突のみを施すという特徴からは、谷尻系土器分布圏の南外縁部における模倣、形骸化した姿を看て取れよう。南四国側へと通ずる特徴でもある。器面調整はナデが主体であり、東に隣接する近畿地方ほどにはケズリ調整は顕著化しない。底部については、ここでも報告事例が皆無であった。多少の違和感が隠せないが、仮に、当該報告



第20図 徳島県南域における Stage22-23の様相

（阿南市宮ノ本遺跡：1・3・7・8・13SX4003、2SX4001、15SB3006、小松島市新居見遺跡：4~6・9・10・12第6包含層、11SP5018、14SK3002出土）

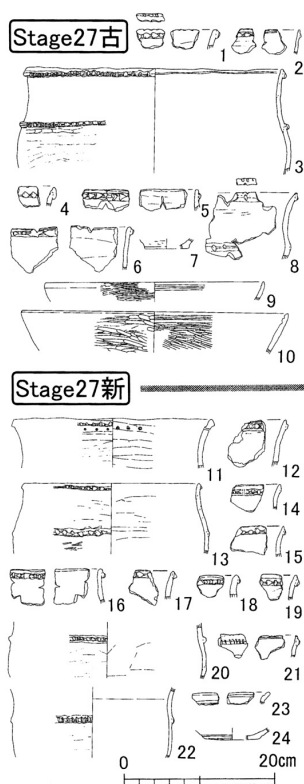


第21図 Stage24~25の様相
(東みよし町土井遺跡; SK1023出土)

でも丸底小片の見落とし等があると仮定するならば、周辺地方の動向に一応合致させることが可能となる。今後、未報告資料群が改めて資料学的にも評価される機会を待ちたい。なお浅鉢は、先述の稲持資料と同様、頸部が長く延びる黒色磨研系の玉縁口縁屈曲形が散見できる（第20図13~15）。

(4) 晩期後葉; Stage24~27の様相

つづく突帯文段階のうち、出現期を示唆する一括資料等についても、残念ながら恵まれていない。従って、器種組成等の十分な検証も未だ困難な状況下にあるといえよう。第21図は唯一、少数ながらも Stage24~25段階の事例として周知される吉野川上流域（Ⅶ d 圏）の東みよし町土井遺跡 SK1023出土土器群（大北編2001）である。1の刻目突帯文深鉢は、口縁より1cmほど下がった位置に明瞭に貼り付けられ、ヘラでD字状に押引きながら刻んでいる。口唇にも前段を継承する直刻が伴うが、弱々しく、不明瞭に付されている。頸胴部界域に施される薄弱な押引刺突文は、前段の Stage23における要素を継承したものであり、本例が、刻目突帯文導入期に近い段階の資料であることを物語っている。成形は内傾接合で、胴部下半にはケズリ調整が顕著である。1・2の内外面に接合痕が顕著に窺える点は、関西や瀬戸内方面へと通ずる特徴といえよう。伴出の4・5もまた同時期の可能性がもたれる。しかしながら5については口唇部の刻目が小振りであり、刻目突帯が口縁端部に近づく点や、頸部の外反が増す点から Stage25に下る可能性もあろう。底部としては、鉢形とみられる径3cmほどの小型凹底が唯一出土している。尖底、丸底介入の有無は、こ



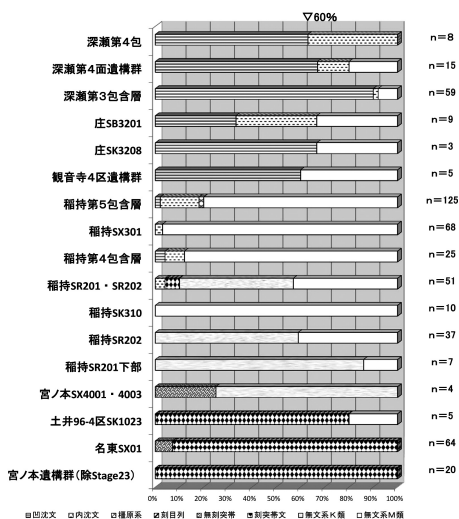
第22図 Stage27の様相
(阿南市宮ノ本遺跡; 1~10SB3001、11・12・14・20・22SX3001、13SX3004、15SX3003、16~19・21・23・24第3包含層出土)

こでも明らかではない。また本来、同伴関係にあるとみてよい浅鉢や、素口縁を成す無文系深鉢（甕）の組成率もまた、残念ながら明確ではない。ただし、後者の無文系土器については、周辺地域の様相から刻目突帯文の登場により激減した可能性をここで指摘しておきたい。

本篇最後となる第22図は、阿南市宮ノ本遺跡資料群（島田編2008）のうち、突帯文期後半、Stage27段階の出土事例を纏めたものである。

図の上段は、概ね Stage27 古相に位置付けられる SB3001・SB3002・SB3004 出土の土器群である。刻目突帯文深鉢（甕）の主流は、頸部の緩やかに屈曲する S 字形（Ⅰ-1-⑦形～Ⅰ-2-⑦・⑧形；幸泉2017p60）である。突帯は口縁端部近くと、胴部最大径よりもやや頸部寄りに合計二条、明瞭に貼付けられている。口唇部に刻目を付す個体は 1・8 のみで、何れも弱々しく、形骸化が著しい。底部については SB3001 の出土事例から、既に平底化が定着していた可能性が高いであろう。平底の底径は 6 cm で、瀬戸内的な器壁の薄い、華奢な作りである。器面調整は口縁部がナデ、胴部については前段のケズリ調整をまだ継承している。概ね沢田式や船橋式新相段階に併行しよう。浅鉢の組成率は低く、壺形の伴出も確認できていない。うち浅鉢では時期比定の根拠となりやすい逆「く」字屈曲形等の系統が全く出土しておらず、不鮮明であるが、沢田式期特有の、内面に二条の横走線紋を巡らすボウル形が複数出土していることから（第22図9・10）、上記編年観を支持しよう。

第22図下段は宮ノ本遺跡の SX3001 出土事例である。型式学的には上記一群よりもさらに一段階程度新しい、Stage27 新相に比定し得る一括例である。深鉢（甕）は屈曲が一層弱まるとともに刻目突帯も矮小化が進み、口縁端部と胴部に弱々しく貼付けられるようになる（第22図11・13・20・22ほか）。概ね沢田式の新相、関西の宮ノ下式に併行しよう。伴出の11は口縁部突帯の直下に貫通型の孔列文が折衷する、東南四国域では稀有な個体である。穿孔は外面から内面側へと貫かれており、瀬戸内側の孔列系土器とは微細ながら施文手法が異なる。類例としては、太平洋側に位置する高知県土佐市居徳遺跡3AB・4B・5A区（佐竹ほか編2003、曾我編2004）の、やや古手の



第23図 東南四国域における
文様系統組成比の変遷2 (Stage16～27)

個体群を挙げることができる。さらにその源流を探れば、外面刺突の孔列系土器は宮崎県川南町尾花 A 遺跡（竹田編2009）等、南九州側で豊富に出土するという事実にとり着くことだろう。つまり、南太平洋を淵源としている可能性が高いであろう。

素口縁の無文系深鉢については、Stage27段階では既に存在しない。底部形態については平底主勢が予想されるが、ここでも図化された資料は掲載されていない。徳島市名東遺跡（勝浦編1990）等の事例から丸底、尖底が遺存する可能性も否定できないが、当面は未公開小片資料を再調査できる機会を待ちたい。

以上、後篇における Stage15～27までの文様系統組成の変遷（深鉢・鉢）を纏めたのが第23図である。

6. 東南四国域の土器編年と無文系粗製深鉢群の動態

本節では、前号掲載の前篇と本稿（後篇）における成果を統合のうえ、東南四国域の Stage 1～27に至る無文系深鉢の動態を、第24-1・2図をもとに纏めていきたい。

まず Stage 2 で、無文系出現期の様相を検証した。該期の無文系深鉢は、口縁部を段状に肥厚させたうえで端部を直立させる例が多い（第24-1図24・25）。従って、伴出の有文諸系統のうち特に、中部瀬戸内における矢部奥田類型や西部瀬戸内の大柿類型、さらには丹後周辺に起源をもつ平類型の一部との類縁性が指摘できよう（第24-1図8・10・16・19ほか）。ただし原則、平縁を堅持する点においては、他地域同様、その出現当初から主体性を具備している。つまり、単に製作途上で施文を放棄したレベルの産物でないことは明白なのである¹⁵⁾。Stage 3 ではまた、そうした中期末の伝統を色濃く反映し、強い内弯屈曲を示す個体から、漸移的に中津式的な強内弯口縁へと変遷する様が見取れた（第24-1図25→40・41→42・43→44・48）。ただ該期の山陰～北陸地方、あるいは西部瀬戸内以西とは異なって、砲弾形を呈する深鉢がこの頃ではまだ皆無に近かった。この点もまた、無文系統の流入経路を考察するうえでは重要な視座となるため、付記しておく。

つづく Stage 4～10、当該地方の無文系深鉢は“組成比 4 割前後”という、比較的低調な構成比率を維持し続ける。これは東南四国域の特徴といえるだろう（幸泉2014a）。無文系深鉢は平縁、粗製という点では主体性が担保され続けるものの、砲弾形のような独自器形には乏しく（第24-1図61・84等）、大半は、有文と同じ屈曲形で占められ続ける。特に Stage 8 の縁帯文成立期から、Stage 9 の初期縁帯文段階にかけては有文深鉢に連動して、屈曲外反の著しい個体が増大している（第24-1図68→69→83）。口唇に刻目を付す K 類型は後期前葉に至り幾分増加するが、西部瀬戸内側等とは異なって、無文系統のなかで主勢を占めることはない（第24-1図55・

60)。むしろ Stage9～10段階においても有文深鉢に準じ、口縁部内外を縁带状に肥厚させる無文系 M 類型に属した有文模倣型深鉢の目立つ傾向が指摘されよう。

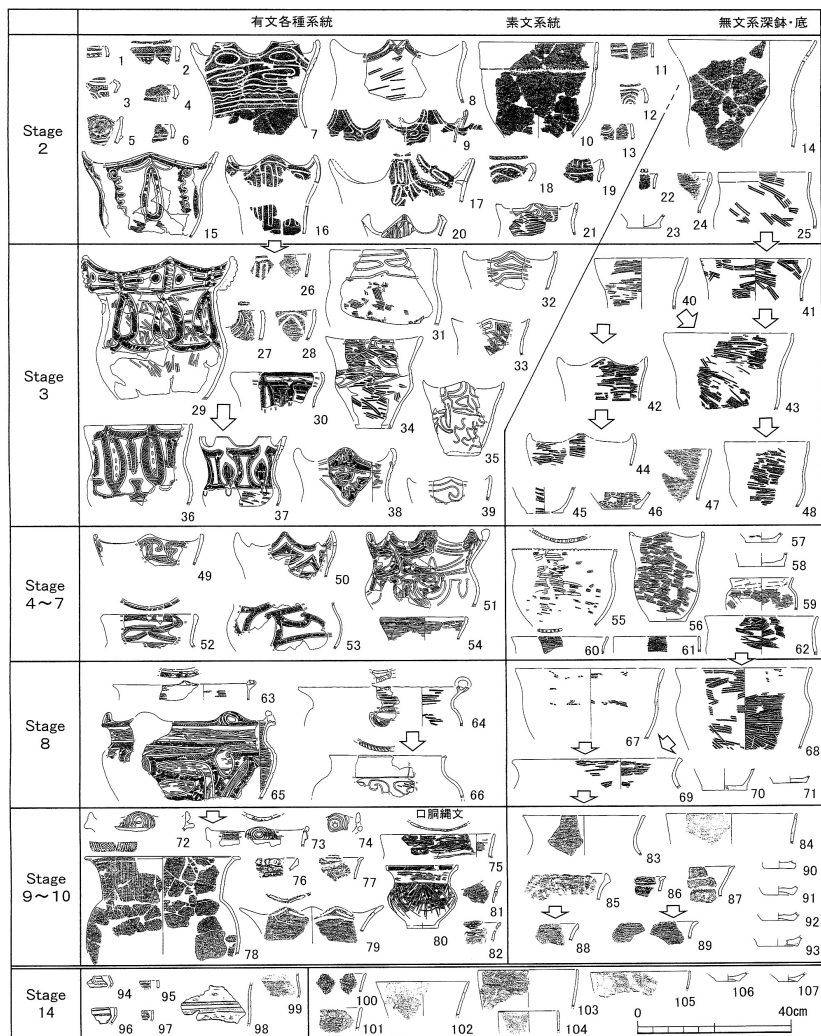
以上、後期前半までの吉野川中～下流域における底部製作技法は、長らく平底が踏襲され続けてきたが、後期前葉後半の Stage10に至り、小型凹底、ないしは準小型凹底への急速な転換が実現される（第24-1図91～93）。そうした技術革新に至る背景としては、中～東部瀬戸内側との新たな交渉関係の成立が比較的容易に想定できよう（幸泉2002ab ほか）。

つづく Stage11～13段階、すなわち彦崎 K1 式中段階～四元式併行期に関しては現状で纏まった出土事例を欠く。そのため、遺憾ながら、上記革新の過程を十分に把握することはできない。前篇ではそうした不備を補う目的で、紀伊水道を介した対岸の大阪湾周辺（VI a 圏）～紀伊半島西岸域（VI b 圏）の様相把握にも努めた次第である。これら関西西岸のエリアでは同じく後期前葉まで無文系統の割合は低調であったが、検証の結果、Stage12（彦崎 K1 式崩壊期併行）前後を境に、様相が激変することを把握できた。それは、関西圏における平底から小型、準小型凹底への転換時期とも合致している。これらから、Stage10で確認できた東南四国域における変化が偶然でないことを確信させる。しかもそれは、関西西岸エリアよりも1～2段階程度早い時期にはじまっていたことを示唆しているのである。

以上を経た Stage14古相の段階として、前篇では、阿波市西谷遺跡の SK1033・1034を挙げた。該期で特筆されたのは、第一に無文系深鉢の組成率の高さ、第二に、異系統外来と称するほかない砲弾形や朝顔形を呈する無文系粗製深鉢の大量出現である（第24-1図100～105）。前者の組成率は、それまでの4割前後から、一気に74%と倍近くにまで上昇していた。該期の急速な器形変化も、これに連動したものであろう。そしてそれらが、西方からの外部介入によりもたらされた可能性を指摘した次第である。具体的には瀬戸内、ないしは山陰側からの影響が想定できるが、それらの背景については、本シリーズ続篇以降の検討作業を経たのち、改めて論じたい。

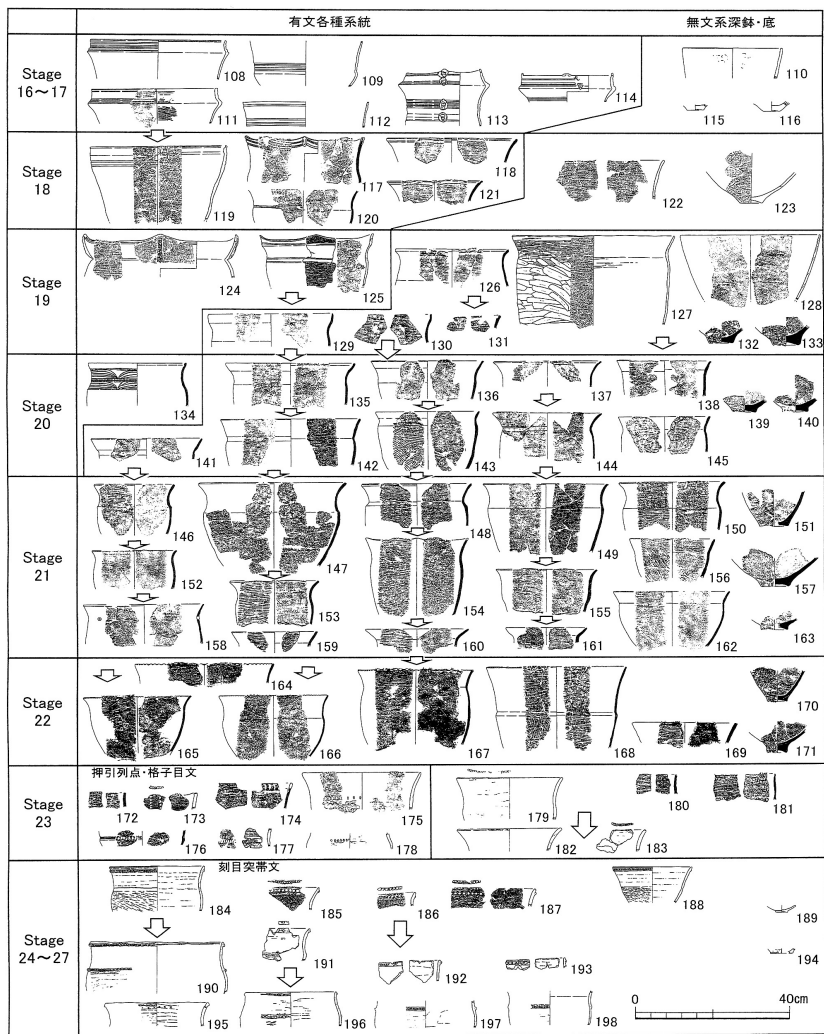
さて、こうして急速に進んだ新たな器種構成であったが、しかし、無文優勢の態勢は長く続くものではなかった。その後、急速な無文化へのリバウンドともいえる凹線文ホライズンの成立により、東南四国域の無文系深鉢は、一端リセットされたかの様相を示すからである。現状では、誕生当初にあたる Stage15の様相が不明であるものの、続く Stage16段階で無文系深鉢は約1割前後にまで激減し、Stage17へと継承されていく（第24-2図108～110）。これらの新事実、阿南市深瀬遺跡の発掘成果（原編2016）により、昨今ようやく明らかにされたばかりである。

もとより他地方と同様、そうしたリバウンド現象もまた、長く続くものではなかった（第24-2図119～122）。それは、上記の相次ぐ激変が単なる復古主義に基づいた



第24-1 図 東南四国域における無文系深鉢の動態(1)

(1～6・11～13田井遺跡包含層、7・9・10・14・17大柿遺跡第13面遺構群、16・18・20・22同第13遺構面直上、19同第13包含層、8・15・21・23～25矢野遺跡3区第5層、26・28・29・31・33・40・41同3区第6面遺構群、27・30・32・42・43・44同4区SR4003、34・35同3区第3層、36同3区第6面直上、37・45～48同3区第3層、38・39同2区SR4003、49同2区3層、50・51・53・55・56同3区第2層、52・54・57～62同2区第2層、63・64・67・68同4区第3面直上、65・66・69～71同3区SB3004、72～75・80・81・83・84同5・6区包含層、78・88～90・92・93荒川遺跡8区包含層、76・77・82・85～87・91松寺前谷川遺跡Ⅲ区、79荒川遺跡9区包含層、94～107西谷遺跡SK1033・1034出土)



第24-2図 東南四国域における無文系深鉢の動態(2)

(108・109深瀬遺跡 SK4015、110~116同第3包含層、117・118・120・121・126・129~145・149・150稲持遺跡 DE区第5包含層、119・122~124・127観音寺遺跡、125・128庄遺跡4次 SK3208、146稲持遺跡 SU301周辺、147・151・152稲持遺跡 SK309、148・161同 DE区第4・5包含層、153・155~157同 DE区第4包含層、154同 SK311、158~160・162・163同 SK310、164~171同 SR202、172・176・181同 SR201第9層、173・187荒川遺跡5-4・5区包含層、174・180稲持遺跡 F10トレンチ、175・182・183宮ノ本遺跡 SX4003、179同 SX4001、177・196同 SX3004、178新居見遺跡第6包含層、184~186・188・189土井遺跡 SK1023、190~194宮ノ本遺跡 SB3001、195・197・198同 SX3001出土)

流れなどではなかったことを意味している。何故なら、無文中心の器種組成完成に向けて、西の縄文土器文化は確実に進展を続けていたからである。

吉野川上流域では学史上、当該期の様相を思料するうえで、西日本レベルで注目されてきた稲持遺跡を擁している。つづく Stage19～23、滋賀里Ⅱ式～篠原式併行期の様相である。本稿（後篇）では、既に稀覯本化した1991年の報告書を頼りに、従来、滋賀里Ⅲa式～谷尻式併行（湯浅1995ほかの稲持Ⅰ～Ⅲ期）として漠然としか認識されてこなかった膨大な資料群に対して、出土遺構や層位地点に関する詳細な型式学的再検証を施した。なかでも主要の存続時期たる Stage18～23段階については、新たに稲持Ⅰ～10期を設定し、論述を進めてきた次第である。結果、新たに見出された Stage20古相や Stage21の3細分案については、本稿（後篇）での考古学的な成果と呼べる部分であろう。無文系深鉢が西日本一帯で圧倒的主勢を示しはじめる同初期段階の年代的指標として、今後の学術的貢献が期待できる。さらに、これらの型式設定を足掛かりとして、該期無文系深鉢群の連続的な推移を復元することにも成功した。稲持遺跡における深鉢の無文化は、凹線文系譜の素文土器の無文化により誕生するものであって、先の Stage14古相でみたような急激な外部影響を契機とするものではなかった（第24-2図108・111→117・119→125→129・130→135・136→141～145→146～150→152～155→158～162→164～167）。これは、既に筆者が検討を終えている北部九州沿岸域や、山陰中部域とは明らかに異なった動勢といえよう。なお、この頃の有文深鉢の組成率をみると、Stage20では既に3%前後と激減している。そしてその延長上として、つづく Stage21、晚期中葉の到来とともに深鉢の完全無文化が達成されたのである。そうした流れのなかで、Stage22には周縁他地方と同様、新たに口唇部への刻目や押引刺突が導入されるようになる（第24-2図164～168）。これらは、新たな外部影響を示唆する変化といえよう。つまり Stage22以降、備讃瀬戸や関西方面からの影響が再び強まってくるのである。

このような Stage22の段階を経て、つづく Stage23、谷尻式併行期では、より視覚的レベルでの個性的な素文意匠が移植されるようになる。すなわち、瀬戸内周辺で隆盛した口縁～胴部への押引刺突文、格子目文、そして爪形文といった素文意匠の導入である（第24-2図172～178）。もっとも、そうした外来影響は視覚的情報の享受に留まるのであって、搬入土器は殆ど認められない。本稿（後篇）では、東南四国域の該期深鉢では頸胴部の屈曲が甘く、施文される意匠も頸部刺突列等を欠き、全般に控え目である点を指摘し、南四国へと通ずる地域差の存在を指摘した（第24-2図175～177ほか）。すなわち、該期における相次ぐ外部影響とは、大量の外来土器搬入や集団移住を前提とするものではなく、あくまで、東南四国域の自主選択的な新文化の享受がその背景に存していたと論じたのである。伴出の無文系深鉢は、前段を継承した屈

曲形 K 類型が一定量（第24-2 図179・182・183）、これに外来影響とみられる接合痕を明瞭に残す180や、砲弾形を呈する181等が窺えるが、ともに、組成率は僅かであった。

こうした個性に乏しい各種土器群の受動的在り様はまた、つづく Stage24以降、刻目突帯文受容の背景として連絡、反映されていくと想定した。ただし、現状では突帯文出現期（神谷川～前池併行）に関する良好な資料が大きく不足しており、本稿では踏み込んだ議論ができていない。唯一、東みよし町土井遺跡の SK1023資料群（大北編2001）で該期の片鱗を垣間見たが、その様相は周縁諸地域と軌を一にしたものであって、大きな地域的個性は認められなかった（第24-2 図184～186・188・189）。また仔細は不明瞭であるが、無文系粗製深鉢の姿も把握できていない。このように現状では無文系廃滅に至る過程を充分明らかにし得ていないものの、大勢としては、日用什器として確立した粗製深鉢（甕）が Stage23～24の時期に刺突文、次いで刻目突帯文へと漸次転換、統一化されていく過程のなかで、やがて、無文系深鉢の命脈が潰えたとみておきたい（第24-2 図190～198）。

結語 一東南四国篇一

以上、本シリーズの第一弾では仮称、太平洋岸ベルト地帯内に位置する東南四国域でこれまで考古学的に未評価とされてきた無文系粗製土器群について、Stage 1～27に至る動態を検証してきた。

学史的にみれば、過去これらの無文系深鉢は西日本各地において、後期初頭の中津式前後の段階と、後期後葉の凹線文期以降の段階が、あたかも別次元の問題として認識、整理されてきた。そればかりか、両者を繋ぐ議論の機会を逸したまま、資料の大部分が博物館収蔵庫等で眠り続けてきたのである。今回、実践研究エリアに定めた東南四国域についても状況は同じであって、前後二篇の検証結果からは、実にさまざまな新事実を明らかにできた。

最初に刮目されたのは、後期初頭から前葉にかけての時期（Stage 3～10）と、後期後葉（Stage16～17）における無文系深鉢の組成率の相対的な低さにあった。なかでも後者の後期後葉については、のち、晩期前葉へと通ずる凹線文意匠の崩壊、さらには素文、粗製化といった流れのなかで、あたかも無文系深鉢が台頭し、晩期から急増したかのような印象を、どうしても受けてしまう。つまり過去、様々な論考等ではば一律に語られてきた、土器無文化に対する一般的シナリオへの帰結である（家根1981、設楽1999ほか）。

けれども、上記解釈は、特定の小地域内における無文系統の消長を一部象徴的に強

調しつつ、表現した姿に過ぎない。そのことは、より広く無文系土器群の動態を鳥瞰し、整理し直すことではじめて、気付くことだろう。既に筆者が別シリーズ等で論じてきたところであるが、北部九州沿岸や山陰中部域等、縄文後晩期を通じて無文系深鉢が卓越し続ける“対馬暖流ベルト地帯”の存在を認識し、それらをめぐる関係を追跡することではじめて、増加が遅れた東南四国域における無文系深鉢の存在意義もまた、本来解釈されるべきなのである（幸泉2017ほか）。本稿では、東南四国域の無文系土器群が北部九州や山陰側とは大きく異なった変遷と内容を具備していたことを、長期にわたる通史的視座から明らかにできた。このことで、本シリーズ第一弾としての意義はひとまず達成できたものと考え、ひとまずは擱筆としたい。

† † † † † † † †

次回、第二篇以降も、まずは考古学レベルでの実践研究事例の整理と蓄積を目的に、引き続き、太平洋岸各地の未評価資料群に焦点を向けていく所存である。縄文文化解体期をめぐる未評価の無文系土器群を当面の実践課題としつつ、順次、新たな見解を披露していきたい。

註釈

- 10) 徳島県東みよし町の大柿遺跡大坪地区で検出された SX10007は、Stage15段階の凹線文系深鉢小片とともに無文粗製の深鉢が比較的多く含まれている。しかし、そうした無文系土器群のなかには晩期中葉にまで下る可能性の強い破片が伴うなど、一括性は保証できない。報告書でも、浅い落込み状の自然地形との表現がみえる（栗林編2001p58・p68）。
- 11) ただし、明らかに混在といえる後期中葉以前と、晩期後葉突帯文期以降の小片資料については、対象外としている。
- 12) 層厚30～40cmを測るとされる比較的安定した包含層である。
- 13) なお近年、平井泰男は岡山県における該期編年を見直すなかで、同 DE 区第5包含層資料を岡山Ⅲ新时期、すなわち関西の篠原式古段階、筆者の Stage21が主体だろうと述べており（平井2009p32）、本稿の見解とは一段階程度の齟齬が窺える。
- 14) もっとも愛媛県松山市久米高畑遺跡第36次 SB004の一括資料（橋本編2013）を鑑みれば、Stage21段階の胴部最大径位置に出現するこうした鋭い屈曲稜線の生成要因として、九州を含む西方からの影響は否定できないであろう。
- 15) 徳島県美波町田井遺跡（久保脇編2007）のように、縄文中期後葉以前においては、そうした製作技法上の未分化個体が散見できる。中途で施文を止めてしまう少数個体の存在意義についても、何れ、本格的な検証と解釈を加えねばならないと考えている。

参考文献

- 合田幸美 1992「第2章8. 土器」『大阪遺跡』大阪府教委・大阪府文化財センター 63-142頁
 浅倉秀昭編 1993『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県教育委員会
 石井 寛 2015「稲ヶ原遺跡出土土器群が提起する諸問題」『紀要』No.19、横浜市歴史博物館 1-36頁
 石田由紀子 2016「北白川 C 式から中津式への変遷とその背景」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史

博物館 139-150頁

- 伊藤雅和・岡田憲一編 2003『西坊城遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所
- 上村佳典編 1984『春日台遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 大北和美編 2001『土井遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 大北和美編 2005『荒川遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 岡崎正雄・深井明比古編 1985『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 岡田憲一 1998「1期 縄文時代（滋賀里Ⅲa式段階）の遺物」『秋篠・山稜遺跡』秋篠・山稜遺跡調査会・奈良大学考古学研究室・正強学園 104-114頁
- 岡田憲一 2003「滋賀里式再考」『考古学論集Ⅲ-1』立命館大学考古学研究室 143-156頁
- 岡田憲一 2008「凹線文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 650-657頁
- 岡本和彦編 2015『新居見遺跡・田浦遺跡発掘調査報告書』徳島県小松島市教育委員会
- 岡山真知子編 1999『庄遺跡Ⅲ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 岡山真知子編 2003『石井城ノ内遺跡-石井曾我団地地区-』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 勝浦康守編 1990『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会
- 勝浦康守編 1994「徳島市三谷遺跡-徳島の縄文晩期突帯土器の終焉-」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 23-30頁
- 勝浦康守編 1997『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 川崎 保 1990「第3章第1節1. 縄文時代の土器」『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会、65-70頁
- 河瀬正利 1984「広島県佐伯郡廿日市町地御前南町遺跡出土の遺物について」『年報』Ⅶ、広島大学文学部 帝釈岐遺跡群発掘調査室 65-86頁
- 久保脇美朗編 1995『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12 日吉〜金清遺跡、西谷遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 久保脇美朗編 2007『田井遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏編 2000『大淵遺跡-1・2次調査-』松山市埋蔵文化財センター
- 栗林誠治編 2001『大柿遺跡Ⅰ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 幸泉満夫 2001「西日本縄文後期土器組成論-瀬戸内地方における凹線文系土器に関する研究-」『考古学研究』第48巻第3号、考古学研究会 85-105頁
- 幸泉満夫 2002a「縄文時代後期土器の非視覚的領域」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会 233-244頁
- 幸泉満夫 2002b「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の地域性」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会 41-64頁
- 幸泉満夫 2004a「2003年の考古学界の動向 縄文時代（中国・四国）」『月刊考古学ジャーナル』№516、ニューサイエンス社 39-42頁
- 幸泉満夫 2004b「西部瀬戸内」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会 53-62頁
- 幸泉満夫・棚次美和子編 2005『大柿遺跡（町道光下新町線関連）』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 幸泉満夫 2005「中期末の調査と成果」『大柿遺跡（町道光下新町線）』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 29-75頁
- 幸泉満夫 2008a「西日本沈線文系土器集成Ⅲ」『研究報告』第33号、山口県立山口博物館 33-68頁
- 幸泉満夫 2008b「西からの視点-中国・四国地方の様相-」『関西の縄文中期末土器』関西縄文文化研究会 79-94頁
- 幸泉満夫 2009a「西日本の後期全縄文土器-粗製土器からみた東日本縄文文化の影響-」『古文化談叢』第61集、九州古文化研究会 1-14頁

- 幸泉満夫 2009b「中国・四国地方における口胴縄文系土器群の成立と展開」『島根考古学会誌』第26号、島根考古学会 1-24頁
- 幸泉満夫 2009c「徳島県域の刻目隆帯文系土器」『考古学と地域文化』一山典選歴記念論文集刊行会 1-8頁
- 幸泉満夫 2009d「徳島県吉野川流域にみる縄文時代後期社会の地域性」『考古学の源流』木村剛朗さん追悼論集刊行会 87-98頁
- 幸泉満夫 2010「四国」『西日本の縄文土器 後期』真陽社 69-112頁
- 幸泉満夫 2012「西日本在地系縄文土器の研究ー刻目素文系土器の提唱とその実相解明ー」『縄文時代』23、縄文時代文化研究会 43-69頁
- 幸泉満夫 2014a「博物館資料学の新たな可能性ー地域に眠る出土文化財の新たな活用システム構築に向けてー」『法文学部論集 人文学科編』第37号、愛媛大学法文学部 87-126頁
- 幸泉満夫 2014b「津雲 A 式土器の型式学的研究」『古文化談叢』第71集、九州古文化研究会 1-48頁
- 幸泉満夫 2016a「彦崎 K 1 式土器の型式学的研究」『古文化談叢』第76集、九州古文化研究会 1-74頁
- 幸泉満夫 2016b「縄文土器にみるもう一つの地域間交流ーStage 1：縄文中期末～後期初頭併行期を事例としてー」『中四国地方における縄文時代の地域間交流』中四国縄文研究会 9-25頁
- 幸泉満夫 2017「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究 1ー北部九州沿岸域における“文様のない粗製深鉢群”の再検証ー」『古文化談叢』第79集、九州古文化研究会 57-118頁
- 幸泉満夫 2018a「須田・中尾瀬遺跡出土縄文土器の分析」『須田・中尾瀬遺跡』香川県教育委員会 180-190頁
- 幸泉満夫 2018b「縄文後晩期における九州系土器の中国・四国地方への波及」『中四国の外来系土器』第29回中四国縄文研究会島根大会資料集 23-32頁
- 幸泉満夫 2018c「未評価出土文化財をめぐる博物館資料学の実践研究(1)ー縄文文化解体期の東南四国域における無文系粗製深鉢群の再検証(前篇)ー」『法文学部紀要 人文学編』第45号、愛媛大学法文学部 23-46頁
- 小林達雄ほか編 1965『米島貝塚』埼玉県庄和町教育委員会
- 小林達雄 1973「多摩ニュータウンの先住者」『月刊文化財』112、文化庁文化財部 20-26頁
- 小林達雄 1974「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号、国史学研究会(國學院大学) 1-14頁
- 小林達雄 1985「縄文時代のクニグニ」『縄文人の智慧』小学館 61-92頁
- 小南裕一 2000「岩田第4類土器小考」『山口考古』20、山口考古学会 1-12頁
- 小南裕一・藤本有紀 2006「川棚条里遺跡出土の縄文後・晩期土器」『山口考古』26、山口考古学会 1-20頁
- 小南裕一 2007「西部瀬戸内の縄文晩期土器」『縄文後晩期の西部瀬戸内』中四国縄文研究会 51-66頁
- 小南裕一 2008「北部九州地域縄文後期末～晩期前葉土器の研究」『古文化談叢』第59集、九州古文化研究会 1-22頁
- 小南裕一 2009「縄文後・晩期土器と板付 I 式土器」『弥生時代の考古学』2、同成社 91-104頁
- 佐竹寛ほか編 2003『居徳遺跡Ⅳ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 定森秀夫編 1984『篠原 A 遺跡』古代学協会
- 潮見 浩 1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『紀要』第18号、広島大学文学部 90-148頁
- 設楽博己 1999「縄文晩期の東西交渉」『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会 1165-1190頁
- 渋谷高秀・佐伯和也編 2005『徳蔵地区遺跡』和歌山県埋蔵文化財センター
- 島田豊彰編 2008『宮ノ本遺跡Ⅰ・大原遺跡・庄境遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 末木 健 1983「土器廃棄と信仰」『歴史公論』9、雄山閣出版 70-74頁
- 杉原和雄編 1979「裏陰遺跡発掘調査概報」京都府大宮町教育委員会
- 鈴木徳雄 1993「称名寺式の変化と中津式土器」『縄文時代』4、縄文時代文化研究会 21-51頁

- 妹尾裕介 2014「第4節 系統、器種としての無文土器」『一乗寺向畑町遺跡出土縄文時代資料—考察編—』
京都大学大学院文学研究科考古学研究室 59-70頁
- 曾我貴行編 2004『居座遺跡Ⅵ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 田川 憲編 2010『観音寺遺跡Ⅲ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 竹田享志 2009『尾花A遺跡Ⅰ』宮崎県埋蔵文化財センター
- 玉田芳英 1989「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観4』小学館 262-265頁
- 千葉 豊 2016「関西地方の後期初頭土器群—研究現状と課題—」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館 161-170頁
- 辻 佳伸編 1994『上喜来蛭子〜中佐古遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 徳島考古学研究グループ 1972『東禅寺縄文遺跡発掘調査の概要』徳島県鳴門市教育委員会
- 豊島雪絵 2010「中国地方における凹線文系土器について」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室、117-137頁
- 泊 強編 2001『貞光前田遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 中村 豊 2008「東部瀬戸内・紀伊水道沿岸地域における凸帯文土器」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会 438-445頁
- 西原和代・妹尾裕介 2014「第5節 系統、土器底部の変遷と地域間の関係」『一乗寺向畑町遺跡出土縄文時代資料—考察編—』京都大学大学院文学研究科考古学研究室 71-80頁
- 橋本雄一編 2013『久米高畑遺跡36次調査』松山市埋蔵文化財センター
- 濱崎真二編 2003『宮の原遺跡』山口県下関市教育委員会
- 原 芳伸編 2016『深瀬遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 平井泰男 2009「岡山県における縄文時代晩期前半の土器様相」『研究報告』29、岡山県立博物館 1-34頁
- 深井明比古編 1998『佃遺跡』兵庫県教育委員会
- 藤川智之編 2003『矢野遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 藤川智之・湯浅利彦 2003「4 縄文土器の位置づけ—後期初頭中津式の成立過程を中心として—」『矢野遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 583-597頁
- 藤川智之・湯浅利彦2004「徳島県矢野遺跡の調査から中津式を考える」『中津式の成立と展開』第15回中・四国縄文研究会徳島実行委員会 19-28頁
- 藤永正明編 1987『淡輪遺跡発掘調査報告書Ⅲ』大阪府教育委員会
- 前川直江編 1996『庄遺跡Ⅰ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 前田敬彦・千葉 豊 1999「海南市且来Ⅰ遺跡出土の縄文土器」『古代文化』第51巻第3号、古代学協会 40-47頁
- 前田義人編 1989『貫川遺跡』4、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 前田義人編 1990『貫・井手ヶ本遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 間壁忠彦・間壁霞子編 1971『里木貝塚』倉敷考古館
- 松田真一編 2011『重要文化財 榎原遺跡出土品の研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 南 久和 1985『北陸の縄文時代中期の編年』転形書房
- 宮地聡一郎 2008「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 790-797頁
- 宮地聡一郎 2013「黒色磨研土器期の無文化現象めぐって」『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念事業会 91-102頁
- 宮本一夫編 1996『萩ノ岡貝塚』愛媛大学法文学部考古学研究室
- 森 清治編 1994『鳴門市埋蔵文化財調査報告書1』徳島県鳴門市教育委員会
- 家根祥多 1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4、雄山閣 238-248頁
- 家根祥多 1994「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」『縄紋晩期前葉—中葉の広域編年』平成4年度科学費（総合A）研究成果報告書（林謙作代表）50-139頁

矢野健一 1994「縄文後期における土器の器種構成の変化」『江口貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究
室 155-168頁

湯浅利彦編 1991『稲持遺跡（図版編）』徳島県教育委員会

湯浅利彦 1993「阿波の縄文人」『鳴門史学』第七集、鳴門史学会 9-18頁

湯浅利彦 1995「徳島県三加茂町 稲持遺跡」『縄文時代晩期の土器編年の諸問題』第6回中四国縄文研究会
徳島実行委員会 1-12頁

湯浅利彦 2017「徳島県域における縄文時代研究の現状と課題」『中四国縄文時代研究の現状と課題』第28
回中四国縄文研究会 41-55頁

挿図表典拠（後篇）

第12図：原編2016、第13図1～4；田川編2010、第13図5、第19・23図、第24図119・124・127；筆者原図、
第14図；岡山編1999、第15～18図；湯浅編1991、第20図1～3・7・8・13・15、第22図；島田編2008、第
20図4～6・9～12・14；岡本編2015、第21図；大北編2001より一部改変。第24図（119・124・127以外）；
前編第5～11図、本篇第12～18・20・22図を基に筆者作成。